

目次

はじめに	9
凡例	11
一 国語とは何か	13
一 日本語の時代区分	16
二 辞書	19
一 古典的な語彙	19
二 中国から入った語彙	19
三 現代の語彙	20
四 類語辞典は役に立つ	22
三 「ウナギ文」や完了の助動詞など、主格と時制をめぐる諸問題	25

一	主語	25
二	ウナギ文	27
三	「:は」以外の主語	31
四	主格の見極め方の二つの原理	33
五	助詞「が」は目的格をあらわすこともある	34
六	完了の助動詞の「完了」とは過去のことではない。	35
七	上までかかる助動詞「ならびの修飾」「対偶中止法」	36
八	日本語には未来を表現する特定の形はない	38
四	接続詞	41
一	主要な接続詞の注意点	43
二	逆接の接続詞	44
三	順接の接続詞	45
四	対比の接続詞	47
五	接続詞の呼応	51
五	注意すべき構文	55
一	SはVだ(Vする)の問題	55
二	名詞の問題	58
六	悪文	61
七	表記法	67
一	表記法とその正しい付き合い方	68
二	正しい表記法(公用文など)の原理を理解する。	70
八	字音語(漢語)の勉強方法	75
九	文語、口語体(書き言葉)、口語体(話し言葉)、俗語	81
一	文語体	81
二	口語体(書き言葉)	83
三	口語体(話し言葉)	84

四	俗語ができる原理	86
十	敬語	91
一	尊敬語の定義	91
二	謙讓語の定義	93
三	丁寧語といわゆる謙讓語Ⅱ	96
四	美化語	97
五	敬語の使い方ルール	98
六	敬語表現の手順	102
十一	方言の勉強法	107
一	方言とは何か	107
二	辞書	109
三	方言の成り立ちⅠ 言語系統語と方言区画	109
四	方言の成り立ちⅡ クレオール	112
五	方言の成り立ちⅢ 方言圏論	113
六	インフォォーマント	113
付録 1	永久保存版 主な敬語専用の表現とその注意点	115
付録 2	永久保存版 語尾のバリエーション	127
参考文献		131

はじめに

みなさんは、近い将来に社会に出て、見知らぬ人とコミュニケーションすることになります。正しく美しい言葉を使うと社会的な信用が得られます。また、それ以前の問題として、自分の言いたいことが相手に伝わらないと大変困ることになります。

国際化の時代と言われながら、国内であれば、たいがいの場合日本語を使用します。日本語の特性を理解する必要があります。しかし、みなさんに喜んで読んでいただけて、先生方にも安心して講義の叩き台として使っていただけるような適当な本がありませんでした。それにはいくつかの理由があります。

第一の理由は、高校までの国語の内容が、実際の仕事に仕えない無駄なことが多いということです。古文の品詞分解や漢文の句形、文学史などの知識は、国文科や国史学科でない限り一生無縁であると言っても過言ではありません。

第二の理由は、必要な分野の説明が通り一遍であるということです。国語学は、語群と語族と語派、方言、文法やシNTAXクスや仮名遣い、敬語、音韻、国語史、国語学史、国語改革、語誌、字音語（漢語）、書道、表記……といった広い部門を持ちます。一通りを概説するのではなく、方言や敬語、構文、

表記など、コミュニケーションを取る際に必要なジャンルについて、踏み込んだ説明が必要です。

第三の理由は、みなさんの中には、学力が非常に高い人がいますが、その人たちの勉強にもなって、普通の人もついていけるような配慮がなされている本がないということです。現代の高等学校のカリキュラム下では、私立理系の方は、国語は高一までしか勉強していないという人も多いです。しかし、大学生は専攻を問わず、社会問題や人間の生死の問題に関心を持ち、政治、行政、哲学、宗教などの本を読みこんでいて深い教養を持つ方もいます。教養を身につけるためには国語の高度な知識が必要です。国語を国文や史学科にしか関係がないことのようにとらえるのは、大変、惜しいことです。知的な好奇心を満足させて、国語の専門的理解の入り口へと誘導する教科書が必要です。

本書は、以上のような点を踏まえて、大学の講義の経験と、予備校講師としてさまざまなタイプの高校生や浪人生を指導した経験を踏まえて、本当に必要な内容は何であるかを検討しました。そして出来た、既存の本の焼き直しや抜粋ではない、一から新しく作り上げた大学生のための日本語の教科書です。大学生なら誰もが知っている項目を省略し、典型的な誤解と大学生にふさわしい発展的な理論上の問題を説明し、同じテーマについて、進んだ勉強ができる専門書を紹介しました。

よろしく、ご活用ください。

末筆ながら編集にご尽力くださった本橋典丈さん、専門分野についてご教示をいただいた鈴木望さん、和田潔さんに深く感謝いたします。

凡 例

例文はそれぞれ、

日本語として正しいものには「○」を付してあります。

例 ○ 英語の授業が難しい。しかし、腹減ったなあ。

日本語として間違っているものには「×」を付してあります。

例 × 英語の授業が難しい。ところが、腹減ったなあ。

日本語として微妙なものには「？」を付してあります。

例 ? 専務が社長に申し上げなさる。

一 国語とは何か

この本の読者は、(在日の方を含めて)日本語を第一言語として生活されている方が多いと思います。日本はほとんどの人が日本語を使用する世界的にも珍しい国です。だから、国語とは何かという点の理解があまりにまいになりがちではないでしょうか。

小さいころから、国語を使って生活してきた日本人だから、国語とは日本語である…と漠然と思いついてきたと思います。

しかし、我々が使っている日本語は、

1 母語

2 母国語(国家語)

二つの意味を兼ね備えたものです。近年、この二つを区別するべきだという意見が出て、学会の常識になりました。

母語

母語は、文字通り親から口移しで学んだ言葉です。

フランスのジャック・ラカンらが明らかにしたように、私らの無意識の領域まで母語が入り込んでいます。したがって、日本語話者同士、フランス語話者同士に、それぞれ無意識のレベルで共通点があると云えます。

人の心理の深いところは、方言も含めた母語の理解が必要です。身体の部位や痛みの質、発想など、その母語特有の表現があります。「喉が、いがらっぽい」「喉の奥が、チクチクする」などの身体の表現、ほかの表現にない独特のニュアンスを持ちます。

母国語

母国語とは母国の言葉という意味です。

政治的に制定された母国の言葉、日本の場合には、標準語のことです。

標準語ができたのは明治時代のことです。日本が国民国家の自覚を持ち、富国強兵にまい進するために、人工的に作られました。言葉が通じないと上司や上官の指示が理解できないから、歩兵や水兵として軍務につくこともできなければ、工場労働者になることもできません。

標準語の中には、

「です、ます」 山田美妙

「である」 尾崎紅葉

「だ」 二葉亭四迷

と、発明者（というより最初に文献で使用した人と言った方が正しいかもしれませんが）が分かっているものもあります。

在日のご家庭出身の方のように、母語と母国語が違うという場合もあります。方言も標準語とは区別された母語であると考えたら、母語と母国語が違う人は、かなりの数に上ります。

日本語以外の言葉を使う人からは、現在の制度は不公平だという声も挙がっています。東京の十条に朝鮮中高級学校という民族学校があります。その学生さんが言っていました。「普通の日本人は、英語と国語を勉強して共通テストを受けます。でも、ぼくらは、朝鮮語、日本語、英語の三つを勉強しなければいけないのに、二つしか使えないんですよ。」と。彼が嘆くのも無理はありません。

また、方言の抑圧もひどいものです。方言を都会で話せば、田舎者扱いされます。テレビで銀行強盗を報じるとき、強盗の言葉をそのまま伝えるのは、「金を出すんや」と犯人は言ったなどと関西弁で話したときだけです。他の方言は、標準語に翻訳されます。

本書は、日本語の標準語の文法、悪文、敬語、などの問題を扱います。一部、母語としての方言をいかに理解するかという問題も教えますが、標準語が正しく、その他がまちがいだというものではないということを念頭に置いて勉強していただければ幸いです。

皆さんは、国語の読解や表現というと共通テストや国立二次の記述問題を連想すると思いますが、そ

ういう問題を解く力は、国語の一部にすぎません、今までの延長を学ぶというよりも、ここから新たに始まるというつもりで学んでください。

一 日本語の時代区分

本語の起源ははっきりわかっておりませんが、以下のことは争いなく言えます。

一 上代以前から、中国語から語彙をもらい日本語化してきました。

仏教などの学術的な語彙、高級語彙が多くをみられます。そうした外来の語彙は原日本語と、明確に区別されてきました。

漢字の使用は、いつからと始まりがわからないほどの大昔からです。いわゆる仮名が発明されたのは、例外を除いて平安時代（尤「ん」の草書体の「ん」は鎌倉時代に普及したと文献から明らかになっていきます）です。

二 時代の区分は、上代、中古、中世、近世、近代です。

上代…西暦九〇〇年ごろまで。奈良時代の『万葉集』など。

中古…九〇〇年ごろから一一五〇年ごろまで。平安時代、菅原道真による「遣唐使廃止の建議」（八

九四年）が提出され、和歌を除いたら詩など漢文学がほとんどだった宮廷で日本語による文学作品が発表されるようになりました。よく知られるように、日本文学の黄金時代です。『源氏物語』『枕草子』『古今和歌集』など。

中世…一一五〇年から一五七〇年ごろの戦国時代まで。源平時代になり、全国の言葉がまじりあい、音便などが行われるようになりました。鎌倉時代や室町時代を中心とする。『方丈記』『徒然草』など。『正法眼蔵』などの仏典も多くあります。

近世…一五七〇年ごろから一八八七年（明治二十年）まで。安土桃山時代からですが、江戸時代が中心です。松尾芭蕉、与謝蕪村、近松門左衛門、井原西鶴、上田秋成などが活躍しました。本居宣長などの国学者も活躍した時代です。『古事記伝』『詞の通路』など国学書も多くみられます。

近代…一八八七年（明治二十年）の言文一致運動以降。夏目漱石、谷崎潤一郎、村上春樹など。近代の次の現代をどこで切るかについては諸説があります。

時代区分ははっきり切れるものではありません。たとえば一五七〇年前後は安土桃山時代ですが、和歌や日記や書簡があっても、新しい文学が生れたわけでも日本語が変化したわけでもないですから、いつから近世が始まったかを明確にすることは困難です。

近代とそれ以前の落差が最も大きいですから、高校の科目は、現代文／古典 という区分になっています。